
吸血鬼と使い魔にされた俺

もち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼と使い魔にされた俺

【Nコード】

N9825W

【作者名】

もっち

【あらすじ】

主人公と吸血鬼のヒロインの物語です。主人公、大沢彰人は親同士の婚約を断って魔界から逃げてきた吸血鬼のエーリに使い魔にされて、魔界の婚約者からの追っ手と戦う羽目に。「おとなしくもう一回させなさいよ!」byヒロイン。「ちょっ! 連続で二回目はきついつて!」by主人公。
素人ですがよろしくおねがいします。

出会いでいきなり

「あれって……人……だよな？」

おおさわあきと

俺はごく普通の高校生、大沢彰人。現在、幼馴染の大河内亜子と

いちのもとがくえん

私立一ノ本学園で別れたあとの帰り道。その途中に一人の少女が仰

おむけ

向けで倒れているのを発見。しかも、なにやら黒いマントをつけて
いていかにも怪しい。

「こ、声をかけるべきなのか……？」

「なるべく危ないことには関わらない」が俺のモットーだが、人
としては助けるべきなんだろう。ここは人がなかなか通らない道だ
し、このまま死なれるというのも気分が悪い。

少し、少しだけ話しかけてみてアウトかセーフを見極めるんだ。

そうすれば問題はないはず。ていうか、顔はすごい端正だし、寝顔
はとても可愛らしい。スタイルは残念だけど……。とにかく、誰も
が見惚れるぐらいの美少女なはずだ。

なら、ここでお近づきになっていれば後々、「感謝の気持ちでメ
イド服着てきました」とか「一生あなたのそばにいます。大好きで
す！」等々、美味しい展開があるんじゃないか？

俺も青春真っ盛りの男子だ。そんなチャンスを見逃すわけない！

俺は意を決して名も知らない少女に近づいた。

「あのー、大丈夫ですか？」

そう言った瞬間だった。女の子がガバッと起き上がり

「（カプッ）」

と、俺の首筋に噛み付いてきたのであった。

出会いでいきなり（後書き）

ありがとうございます。次回もよろしくお願いします。ちなみに他にも「剣と書いて初恋と呼ぼう」（魔法もの）と「ゴーストハンター　　いわば神様のパシリ」も連載しています。よろしければ読んでください。

ごちそうさまでした

何かなにやらわからない。俺は普通に倒れている美少女を助けようとしたんじゃないかってたつて。

「（ゴクゴク）」

彼女の喉のどから飲み物を飲むときの音が聞こえる。

そして、彼女は缶ジュースなどの飲み物を手にしていない。俺の首に口を当てている。

ということは――

「ゴクッ……フウ。ごちそうさまでした」

――彼女は吸血鬼――

その考えに行き着いたときには意識を失っていた。

「……んあ？」

ここは……俺の部屋？ 目を覚ました俺は周りを見回す。

じゃあさっきのは……夢？

「よかったあ」

つい安堵の息が漏れる。

それもそうだな。よくよく考えたらこの世に吸血鬼なんているわけないもんな。

「（グゥ）」

安心したからか俺の腹から大きな音が鳴った。そういえば、夜ごはんをまだ食べていなかった。

「作るのも面倒くさいし、外食で済ませるか」

俺はベットから立ち上がり――ちよつと待て。今、ベットの上はどこかで見たことのある黒マントがあったぞ。あの吸血少女との出会いは俺の記憶が正しければ夢の中の出来事のはずだが……。まさか、な。

有り得ないと思いながら毛布をバツとめくり上げると、そこには

「ええええええええええ!!」

——先程の吸血少女がすやすやと寝ていた。

ごちそうさまでした（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしく願いします。感想も待っています。

吸血少女のエーリ（前書き）

ありがとうございます。おかげさまで、たった二日で100アクセス突破しました。これからも皆さんが楽しめるよう頑張りますのでよろしくお願いします。

吸血少女のエーリ

「ん……なに？ うるさいわね」

俺の声で目が覚めたらしい吸血少女が体を起こす。

「お、お前！　なんでここにいる！」

俺は動揺しまくりだった。当たり前前の反応だろう。夢の中の出来事の吸血少女が目の前にいるんだぞ。誰だってこうなるに決まっている。

「なんでって………なんでだろう？　教えて？」

「こっちは聞きてえよ！」

「うるさいわね。静かにしなさいよ」

「理不尽だ！？」

こいつは家に入れてもらっている身のくせになぜこんな偉そうにしているんだ。ていうか、俺の家族がいたらどうするつもりだったんだ、こいつは。幸いにも、両親は世界一周の旅にでいたから助かったけど。………俺が。

うちの母親はアホなのできつと俺の話も聞かずに「こんなかわいい子を騙して！」とか言って俺を殴り倒すに決まっている。想像するだけで恐ろしい。それだけは勘弁だ。

「大体、お前は誰なんだよ？　俺はお前なんか見たこともねえぞ！」
多分だが。

「私？　私はエーリ・ミナルバ・ルーク。特別にエーリって呼んでいいわよ、使い魔^{げぼく}」

「………は？」

つい口から漏れてしまった。待て。今、下僕って聞こえたんだが

………まさか——

「——俺のこと？」

「そうよ」

吸血少女はあっさりと認めた。

「じゃあ、私の情報を教えたことと引換えに——いただきます」
ひきかえ

吸血少女はカプリと待ち遠しかったかのように俺の首筋に噛み付いた。

「え？　ちよつと待て、お前ええ

え……」

俺は本日二度目の眠りについた——

吸血少女のエーリ（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしく願います。また、アドバースなど工夫点がありましたら是非教えてください。待っています。

嫌な奴（前書き）

ありがとうございます。おかげさまで200アクセス突破しました。これからも皆さんが楽しめるよう頑張りますのでよろしく願います。

嫌な奴

——って、たまるか！

俺は意識が遠のく前にエーリの体を突き放した。

「きゃっ！」

しかし、血を吸われたので力が出なかったのかエーリは思ったほど飛ばなかった。

「ちよっとなにするのよ！ 痛いじゃない！」

「それはこっちのセリフだっつーの！」

「^{げぼく}使い魔のくせに主人に反抗する気なの！」

「^{げぼく}下僕？ そんなこと知るかよ！」

お互いに声を荒らげて思ったことを率直にぶつけ合う。

「そこに座りなさい、^{げぼく}使い魔！」

「嫌だね！ 大体、下僕、下僕って俺には大沢彰人って名前があるんだよ！」

「じゃあ、彰人！ そこに座りなさい！」

いきなり呼び捨てかよ。つくづく気に入らねえな、こいつは。

「だからイヤって言うてるだろうが！」

「ああ！ もう！ いくら死にかけだったとはいえ、なんでこんな奴を^{げぼく}使い魔にしたのかしら！」

「はっ！ 運がついてなかったんじゃねえの」

「まったくよ！ 目覚めたら知らない世界にいるし！ 訳わかんない男に追われるし！」

……ん？ 目覚めたら知らない世界？ 何言ってるんだ、こいつ。いや、まあ、俺の血を吸っている時点で人間ではないと思っていたけど。

でも、そんなことより今は気になる点がふたつ。

一つ目は血が上っていたので気付かなかったが俺の部屋の窓が割れていたこと。もう一つは——

「なあ、お前を追っている男って、もしかして……」

「ええ、あんたの隣にいるその男よ……ええええええ！」

エーリの言う男が俺の隣に立っていたことだ。

嫌な奴（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしく願いします。感想も待っています。

追っての男（前書き）

ありがとうございます。おかげさまで400アクセス突破しました！ これも読んでくださっている皆様のおかげです。これからもよろしく願います。

追っての男

落ち着け、俺。今の状況を簡単に整理するんだ。

まず、エーリはある男に追われてこの世界に来た。これは多分本当っぽい。あいつ自身も吸血鬼だし。なら、エーリを追っているこの男も吸血鬼の可能性が高い。

男は大木のように大きく身長は軽く2メートルはあるに違いない。腕も女性の腰ぐらいの太さ。そんな巨漢のすぐ横にいる俺。

……かなり危険じゃねえか！

急いで逃げようとする男が手で俺の体を掴む。

「おい！ 俺は関係ないだろ！ 離しやがれ！」

俺が男の手の中でジタバタと暴れると、男が口を開けた。

「落ち着いてください。私はあなたに危惧を加えるわけではありません」

「え？ そうなの？」

この巨漢は言葉遣いも礼儀正しく、とても体に合わない性格をしていた。

「ええ。あなたがあその少女を私に渡してくれたら……ですがね」

「ああ、そんなことですか」

「ちよっと待ちなさいよ、使い魔！ あんた、主人をその男に売る気！？」

「当たり前だろ。今までの自分の行動を思い出してみろ」

おれがそう言うのと、腕を組んで考え込むエーリ。

俺の血をいきなり吸ったり、勝手に人の家に上がり込んだり、俺のことを下僕扱いしたり、と俺が得した点は一度もない。助ける訳がない。それぐらいあいつでもわかるはずだ。

「あんたに迷惑かけたことなんて一回もないわ！ むしろ、得をさせたくらいよ！」

「嘘付け！」

「どうやったらその答えに導かれるんだよ！ 無理だろ！ どんだけ頑張っても無理だろ、今の返答は！」

「あのー、そろそろいいですか？」

俺たちの会話を待っていてくれた男が尋ねてくる。紳士だな。

「ええ、持って帰ってください」

「では、遠慮なく」

「ちょっとー！！！」

エーリは俺を視線で殺せるぐらいの目で睨んでいた。

追っての男（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしく願います。また、アドバイスなど工夫点がありましたら是非教えてください。あと、もうそろそろバトルに入っていきます。今まで読んでくださった方々もはじめての方々も楽しめるように頑張りますので待っていてください。

男の豹変

「さあ、来てもらいますよ」

「やめなさいよ!」

男がエーリを連れていこうとするが、抵抗するエーリ。

「なら、こちらにも手段というものがあります」

男が拉致^{らち}があかないと思ったのか、強行手段に出る。

「ちよつと! そんな汚い手で触らないでよ!」

「なるべく傷を付けるなど言われていたが……仕方がない」

男がエーリの細い手を掴んだと思うと、ゴキツと鈍い音がした。
なんと、エーリの手を男がへし折ったのだ。

「いたっ!! うう……」

エーリの苦しんでる様子が嫌でもわかる。いくらあいつが言うこと聞かないからってこんなことまでしていいのかよ。

「あなた様は吸血鬼です。これぐらい時間が経てば自然と治るでしょう。さあ、行きますよ」

男がグイッとエーリを抱きかかえる。

「……いやって言うてるでしょ! その汚い手で触らないで!」

バシン! とエーリが平手で男の頬を叩いた音が響く。その瞬間、男の目付きが変わった。

「……てめえ、下出に出ていたら調子に乗りやがって……! もう頭に来た! もっといたぶってから連れて行ってやる!」

「キャッ!?!」

先程までの温厚な性格が嘘のように、男が怒りだし、エーリを壁に叩きつけたあと、男が手に光を集めてヤリの形にしたものを作り出す。そして、衝撃で動けなくなったエーリの体めがけて鋭利な形をしたその槍を突き刺そうと振りかぶった。

「喰らいやがれ! 制裁^{ジャッジメント・スレイフ}の槍!」

俺は動揺しまくりだったが、いくらなんでもそれはやりすぎだろ

うと思い、エーリを助けようと飛び込む。

（あれ？　なんで俺、こいつを助けようとしてんだ？）

そう考えたのは男の槍からエーリをギリギリ守った時だった。自分でも不思議に思ったがそれも一瞬。エーリを助けたことにより俺も男の標的に入ってしまったのだ。

「貴様も私の邪魔をするのか……。なら、殺す！」

はあ……。全く勘弁してもらいたいのだ。

俺はため息をつきながら、ここ数年握ってなかった竹刀を手にとった。

「少しでもなら……。相手してやるよ」

男の豹変（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしく願います。また、アドバイスなど工夫がありましたら是非教えてください。感想も待っています。

チェックメイト（前書き）

ありがとうございます。お陰様で800アクセス突破しました。これからも「吸血鬼と使い魔にされた俺」を応援よろしく願います。

チェックメイト

「ふん、貴様如きが私の相手だと……？　笑わせるな！」

「やってみなきゃわからねえだろ？」

俺がわざと挑発するように言う。

「いいだろう！　私に楯突いたこと、後悔させてやる！」

男は見事に先制攻撃を仕掛けてきた。

先ほどと同じ方法で今度は剣を手に持ち、俺の頭めがけて振り下ろしてくる。

俺はそれを一步横にずれ、ギリギリで躲かわす。俺が元いた場所は、下まで穴が貫通していた。

「ふははは！　どうだ、この威力！　おじけづいたか！」

自慢げに高らかに笑う男。

「自慢はいいからさっさと来いよ、おっさん」

「その強気な態度もいつまでもつかない！」

もう一度同じ動作を繰り返す男。

確かにパワーはすごかった。人間が太刀打ちできる相手じゃない。だが――

「なっ！？」

「――スピードはトロイぜ、おっさん」

俺はおっさんの斬撃を利用して、振り切る前に懐ふところに入り喉元に竹刀の先を突きつけていた。こうしておけば、あとは勝手に男の方から振り切ったと同時にクビに竹刀が突き刺さる。

おっさんの攻撃は全体重をかけた力任せだからな。

「がはっ！！」

予想通り喉のどにクリーンヒットしたらしく、男が床に倒れ込む。

そして、俺は喉を抑えて苦しんでいるおっさんに近づき首の横に竹刀を薙ぎ払い、ピタッと止める。

「チェックメイトだぜ、おっさん」

チェックメイト（後書き）

毎度ありがとうございます。次回もよろしく願います。また、アドバイスなど工夫がありましたら是非教えてください。

人生初体験——空を飛ぶ（前書き）

1000アクセス突破！ これも皆様のおかげです。これからも「吸血鬼と使い魔にされた俺」をよろしくおねがいします。

人生初体験——空を飛ぶ

「くう……。私の負けだ……」

男が音を上げる。どうやらあきらめたようだ。

「ふう……」

安心した俺は男の首から竹刀を引く。だが、これが命取りになった。

「甘いわ、小僧！」

「がっ!？」

男が待ってましたというように首を絞めてくる。

や、やべえ……。このおっさん、本気で殺しにかかってきやがった。

「さあ、死ねえ！」

さらに力を加えてくる。

これじゃあ、真剣に意識が……。竹刀で男の体を叩くが気にも留めていない。

「うう……!」

必死にもがくがマウントを取られては、身動きができない。竹刀を握っていた手の感覚もなくなってきた。

ばあちゃん。俺もそろそろそっちに行くよ。そう思った時だった。

「あんた! 私の使い魔^{けぼく}を離しなさい!」

「エーリ……」

声のする方を見ると背中に漆黒の翼が生えたエーリがいた。

何も考えないままにこっちに突き進んでくる。

「あ?」

俺を殺すことに必死だった男は冷静さを失っていたらしく、エーリに気づいたときは壁に吹き飛ばされたあどだった。

「サンキュ。助かった——」

「逃げるわよ!」

「――は？」

エーリは男を吹き飛ばした勢いのまま俺の手を掴み――
「うわあああ!？」

――月に照らされた闇に舞った。

人生初体験——空を飛ぶ（後書き）

毎度ありがとうございます、次回もよろしくお願いします。また、アドバイスなど工夫がありましたら是非教えてください。

空から地上へリターン（前書き）

久しぶりの投稿です。これからまた連載再開としますのでよろしくお願いします。

空から地上へリターン

「落ちるゝゝ!!」

「ちよつとおとなしくしてよ! 本当に落とすわよ!」

そんなこと言われても! おまえは吸血鬼かもしれないが、俺は人間。なにも安全装置を付けないで空を飛ぶなんてことをされたら誰だって俺と同じ反応をするに決まっている。

「ちっ。王に逆らう異端者共があ!」

「追っかけてきやがった!」

鬼のような形相で。

「しっかり掴まりなさい! 少しスピード出すわよ!」

「マジかよおお!」

死ぬ! 死んでしまう! ……そうだ。こんなときは心身を落ち着かせるんだ。かんじーざいぼうさーぎょうじんはんにゃはらみた——って仏教唱えている場合じゃねえ!

そんな俺の気持ちも無視してエーリは左右に飛び回る。しかし、なかなか大男を振り切れずに数分飛び回り続けていた。

「いい加減に逃げるのをやめたらどうだ!」

うるせえな、近所迷惑になるだろうが。ていうか、今、大男を見てわかったが、さっきからエーリのスピードが落ちている気がする。……気のせいかな?

「どうかしたのか、エーリ?」

「つ……つかれた……」

「え!? もう!?」

「しょうがないでしょ! ずっと城の中にある自分の部屋で暮らしていたんだから!」

「典型的なニートじゃねえか!」

「も、もうダメ……」

「うおおおい!」

エーリはついに体力が切れて、地上に向かって落下していく。そして、ついにゴミ山に落ちてしまった。

空から地上へリターン（後書き）

読んでいただきありがとうございました。これからも宜しく願います。

普通にピンチ

「いてて……」

俺は何とか体を起こす。

落下した場所がごみ山で助かった。コンクリの壁とか屋根の上だつたら確実に死んでいただろうからな。神様に感謝だぜ、本当。

「おい、エーリ？」

「う、うん。……なんとか……っ！」

エーリが顔を苦痛にゆがめる。

手で足を押さえていたので見てみると、赤くはれ上がっていた。どうやら、今の墜落で足を痛めたらしい。

「立てるか？」

「ふ、ふん。使い魔の手なんか借りなくてもこれぐら、いたっ！」
相当痛むのか、へたへたと崩れ落ちるエーリ。歩くことさえままならない状況で、いやな笑みを浮かべながら大男も地に降り立つ。

「くくく、足を怪我したか。これで逃げることはできまい」

そう言つて手に作った制裁ジャッジメント・スピアの槍を放り投げてくる。

「きゃあ！」

「あぶねえ！」

俺は動けないエーリを抱きかかえ、全力で突っ走る。

「クハハハ！　いつまで持つかな？」

あの様子からして大男は疲れてないし、むしろ生き生きしている。それに対して、こっちは一般人と負傷したニート吸血鬼。しかも、武器もないので無手だ。

……………あれ？

何気に絶体絶命のピンチじゃね、これ？

普通にピンチ（後書き）

読んでいただき有り難うございます。次回も宜しくお願いします。

大男を倒す方法（前書き）

おかげさまで自身の作品で初めて2000アクセス突破です。ありがとうございます。これから末長くよろしくお願いします。

大男を倒す方法

大男の追跡から逃げ続けて10分ほど経った。商店街まで逃げた俺とエーリは現在、とある店の中に隠れていた。

「さあ、どこか、な！」

大男が一つずつ制裁の槍で店を壊していく。まだ俺達の居場所はわかってないようだ。

エーリを抱きかかえながら走っていた俺は逆転の糸口も掴めず、体力に限界が来ていた。町でこんなことをしていたら警察とか来るだろうと思っていたが、人はみんな、動かずに固まっていた。エーリ曰く大男によってこの人たちの時間は止められているんだとか。まあ、今はそんな理屈はどうでもいい。なんとかあいつを倒さないと。

「なあ、エーリ。なんとかあいつを倒す方法はないのか？」

「あるにはあるけど……」

「あるのかよ！ 早く教えろ！」

「駄目なの、この方法は！」

「なんで!？」

「あなたの人生に関わるからよ……」

「！」

こいつ……。自分の人生が終わるかもしれないって言うのに俺のこと心配してたのかよ。さっきも助けてくれたし、俺のことを下僕とか言ってる割には優しいんだよね……。

エーリは自分の人生をかけているんだ。なら、俺も人生の一つや二つかけてやらないとな！

「……それでもいい。教えてくれ」

「ええ！？ いいの、あなたはそれでも!？」

「ああ。だから、はやく！」

「わ、わかったわよ……」

エーリは少し頬を赤くしてからこう言った。

「キ、キス……よ」

「……は？」

まさかの発言だった――。

大男を倒す方法（後書き）

読んでくださってありがとうございました。次回も宜しく願います。

本契約。それは、キス。

「おまえ、ふざけてんのか！　キスしてどうやってあいつを倒すんだよ！」

「うるさいわね！　契約するのよ、わたしと！」

契約？　漫画とかでよく見るあれか？　主人公が急にパワーアップしたりするあれなのか？

「いい？　あんたは私に血を吸われたせいで少しは基礎能力は上がっているけど、あくまで『仮契約』状態。ほとんど普通の人間と変わらないわ」

「ふんふん」

「そこでわたしと『本契約』を結ぶの。本契約すれば、人間ではありえない能力を得ることが出来るわ。で、その方法が」

「キスってわけか」

コクリとうなづくエーリ。

「じゃあ、さっそくキスするぞ」

「ええ——って、ちよつと待ちなさいよ！」

「痛い、痛い、痛い！」

唇を寄せたら顔を思い切り殴られた。

「なにすんだよ！」

「それはこっちのセリフよ！　いきなりキスしようとするやつがどこに居るの！？」

「そんなこと言ってる場合か！　早くしないと俺たち殺されるんだぞ！」

「うう。で、でも、吸血鬼の私と契約したらあなたは人間ではなく本物の使い魔として、あいつらに扱われてしまう。そしたら今度は和解もなしで襲ってくるわよ。あんたはそれでもいいの？」

エーリの瞳の奥に悲しみが見えた瞬間だった。何だよ、こいつ。口ではそんなこと言っておいても、目はどう考えても「助けて」と

言ってるようにしか見えないぞ。

「ああ、いいよ。それって死ぬときまでお前と一緒にだってことだろ？」

「そ、そうね」

「おまえみたいな美少女と一緒に死ねるんなら俺は本望だよ」

エーリを安心させるために冗談を言ってみる。

「なななな！？」

「だから、早く『本契約』を結ぼう」

「わ、わかったわよ！」

エーリはスウ、スウと呼吸を整えると、何やら呪文を詠唱し始める。

「幸福を祈る。我らが歩む道はそうであることを。幸福の対象は我が使い魔との契約。今、ここでふたりの忠誠、信頼、すべてをかけて誓おう。我らは永久に共に同じ道を進むことを！」

エーリがそう言う俺たちの足元に幾何学的模様をした魔法陣らしきものが描かれる。

「これで準備はオーケーよ。だ、だから早くしなさい」

「お、おう」

いざ、キスをするとなると緊張する。大丈夫だ、落ち着いて、落ち着いて。……よし！

俺は覚悟を決めた。そして――

「んっ」

――エーリの唇に自分の唇を重ねた。

本契約。それは、キス。（後書き）

読んでくださってありがとうございます。次回も宜しく願いします。

覚醒（前書き）

いつもありがとうございます。

覚醒

やわらかい。女子の唇ってこんなに柔らかいものなのか。それに、温かい。距離が近いせいかな。エーリの鼓動を間近に感じる。しかし、その時も終わり、エーリが唇を離す。

「……これで完了のはずよ」

「そ、そうなのか？ でも、何も異変、は！？」

急に体全体に激痛が走る。これは我慢できるとかそういうレベルじゃない。頭がグワングワンと揺れる。吐き気が止まらない。その場にうずくまって痛みを少しでも和らげようとするが、ほとんど意味はなかった。

「ちよ、ちよっと大丈夫？」

「あがぁ……。ぐ、あああああ！」

痛みに耐えられなくなり、ついに声をあげてしまう。もちろん、大男はそれを聞き逃さなかった。

「なるほど。こっちか」

カツン、カツンと大男の足の音が歩み寄ってくる。今すぐにもここから逃げないといけない。なのに、体は動かない。どうすればいいんだ？

「こゝこか、な！」

「危ない！」

エーリが俺を突き飛ばす。その時、ザクつと鈍い音が聞こえた。

「いって、なにすんだ——」

そこで言葉が止まる。

なぜなら、目の前でエーリが制裁の槍ジャッジメント・スピアに胸を貫かれていたからだ。あたり一面に赤い鮮血が飛び散っている。エーリの血が。

「おやおや、一人殺やってしまいましたか。まあ、こちらは吸血鬼。死んではいけないでしょう」

大男はけたけたと笑っている。これが当たり前のように。

「……おい、おまえ……。何してるんだよ？」

「ああ、気にしないでください。私は気分がいいのであなたは殺さないであげますから」

「うるせえ！ そんな事を聞いているんじゃない！」

俺は痛みも忘れて、大男に向かって叫んだ。

「エーリに……。俺のエーリしゅじんに何してんだよ！」

その瞬間、俺の両手が光りだした。

覚醒（後書き）

読んでくださってありがとうございます。次回も宜しく願います。

もし、よろしければ評価とお気に入り登録もお願いします。

決着（前書き）

今回でバトル終わります。

決着

「な、なんだ、これ？」

光がやむと、俺の両手は鋼鉄の手に変わっていた。

握ったり、開いたりすると機械のようにギシギシと音が鳴った。

「……あなた、もしかして『本契約』したのですか？」

「ああ、そうだが」

「なんということでしょう！ そんなことをしたら私は貴方も殺さないといけないではありませんか！」

大男は大げさに悲しむふりをする。だが、それも一瞬で態度は一気変わる。

「……まあ、実際は貴方も殺したかったのでいい口実が出来ただけですね。むしろ、ラッキ」

気持ち悪い笑みを浮かべやがって。腹が立つ野郎だ。

「ごちゃごちゃ言っていないで早くかかってこいよ」

「……わかりました。では、あなたも殺すとしましようか！」

大男は手におなじみの光の槍を作る。

ジャッジメント・スピア
「制裁の槍！」

「くっ……あああ！」

俺は槍を両手で掴み、大男の攻撃を止める。

「なにっ!？」

「……さっきは、よくもやってくれたよなあ？」

「くっ！ 離せ！」

ジャッジメント・スピア

大男は制裁の槍を押したり引いたりするが俺は絶対に離さなかった。エーリをあんな目にあわせて、ただで返すはずがない。俺の怒りメーターはとくに振り切っているんだ。俺は必ずこいつを……殺す！

『!』

急にまた俺の手が光りだす。だが、今度は制裁の槍も巻き込んで

ジャッジメント・スピア
いた。制裁の槍は形をグニヤリと大きく変え、光の剣となり俺の手
に握られていた。

ジャッジメント・スピア
「わ、私の制裁の槍が！？」

ジャッジメント・スピア
「制裁の槍ならぬ制裁の剣って、ところか？」

「そう言っ
て俺は剣を振った

「がああああああ！」

大男の叫びが響く。

ジャッジメント・ソード
制裁の剣が大男の右腕を切り落としたからだ。

「さて……次はどこを切られたい？」

「ハア、ハア……くそおおおお！」

大男は左手で殴りかかってくる。

「懲りない奴だ」

俺は何のためらいもなく、その腕も切った。

「あああああああ！」

ついに大男はうろたえながら逃げ出す。もちろん、逃がすつもり
はない。

俺は大男の頭上を飛びこえて、大男の行き行く先に立つ。

「く、くそ！　くそ！　この人間があああ！」

大男はそのまま直進してくる。

「死ねよ」

「がっ！？」

大男が大きな音を立てて倒れる。体が半分に割れた状態で。

「おまえが馬鹿にした……人間の手でな」

決着（後書き）

読んでくださってありがとうございました。次回も宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9825w/>

吸血鬼と使い魔にされた俺

2011年12月2日21時54分発行